

第 8 章

研究機関とサイエンス・コミュニケーション(2)

研究機関の広報について

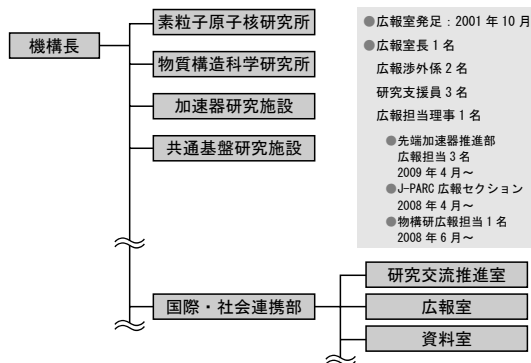
森田 洋平 高エネルギー加速器研究機構 広報室

1. 高エネルギー加速器研究機構 (KEK) の広報体制

1.1 広報室の体制と仕事について

現在、研究所の組織は【図 1】で示されます。素粒子原子核研究所、物質構造科学研究所、加速器研究施設、共通基盤研究施設の 4 つの柱以外に、国際・社会連携部がありますが、広報室はそこに属しており、発足は 2001 年 10 月です。現在、広報室長の私、広報渉外係 2 名(常勤)、研究支援員(非常勤) 3 名、広報担当理事 1 名で構成されています。その他、先端加速器推進部、物質構造科学研究所、J-PARC にも広報担当や広報セクションがあります。

【図 1】 KEK の組織図



研究機関広報の仕事の基本は、研究成果や実験進捗、実験施設建設

のニュースなどを分かりやすく伝えることです。その際、専門用語や概念をどう分かりやすく翻訳して伝えるかが重要です。また研究者は往々にして、自分の専門領域しか見ていないことが多く、研究成果が社会にとってどんな意味があるか、社会からどう見られているかについて全体的な位置づけ（相対化）をしながら説明することに慣れていません。そういう研究者の書くニュース原稿は、一般の人にとって難解で理解しがたいことが多いものです。そこで、その研究を全体の中で相対化して位置づけて伝えることも広報の仕事です。

その他、外部からの問い合わせに応じることも大切な仕事です。たとえば地域住民から、「何かおかしい現象があるが、それはこの研究所のせいではないか」といった問い合わせもあれば、個人や団体（修学旅行など）から見学の申し込みもあります。もちろん、メディアからの問い合わせもあります。さらに、各種のパンフレット、ビデオ、ウェブのコンテンツ制作なども日常的な仕事です。それ以外には、一般公開、講演会、サイエンスカフェなど、アウトリーチ的なイベントの企画と実施も担っています。

また、リスク対応も広報の仕事の領域です。これまでの例としては、放射線管理区域の中、中性子の実験施設で小火があり、それがマスコミから取材されたことがあります。それについて、原子炉のように危険性がある事故ではなく安全であることを広報しなければなりません。そこで対策本部を設置して、放射線管理や加速器の専門家が集められたので、そこに広報担当も出向いて、次々と寄せられるマスコミからの質問に対して、実験施設の特徴、火事の原因、安全性について説明をしました。同時に、ウェブにも、それらの情報を逐一公開しました。それによって「放射線管理区域で火災」という、文字面だけ見るとびっくりするような事態について実態が理解され、リスクをある程度コントロールすることができるわけです。情報を正しく伝えることによって、風評被害を未然に防ぐことも広報の仕事です。

また、そのとき大切なのは、機構のトップと密接な連携網ができていることです。ふだんのニュースや研究成果の公表もそうですが、特

にリスク対応の際には、広報と機構のトップが密接に連絡をとりあってメディア対応をしていかなければなりません。それは研究機関に限らず、どんな組織でも同様です。昨今、不祥事の際の記者会見の仕方が、かえって火に油を注ぐ事態を招いた事例もしばしば見られましたが、記者会見のタイミング、謝罪の仕方などを組織のトップに伝えることも広報の重要な仕事なのです。謝るのなら、なるべく早い段階で、そして1回ですませるように、きちんと情報公開し、納得される説明をすることが鉄則です。説明がマスコミに納得されれば、大きな事態にはなりません。その対応に失敗すると、延々と事態が悪化し続けることになります。その意味で、負の側面をマネジメントするのも広報の役割なのです。

1.2 広報の基本としての「先読み」「気配り」「火消し」

では、「分かりやすく」とは、具体的にどんなことを意味しているのでしょうか。研究者はとにかく専門用語、厳密さ、自分の研究成果だけの差別的発表にこだわります。それはある意味では、研究者として健全な姿勢でもあるのですが、社会に説明するときは、それでは通用しません。研究者に限らず、現代社会においては、専門家は自分の領域のことには精通していますが、専門領域以外については知らないことが多いのです。特に研究者は、自分の研究領域にこだわる傾向が強く、一般向けの記事の執筆を依頼しても、上記の習性が染みついているため、学会発表のような論文を書いてしまいがちです。当然のことですが、一般読者は背景知識を持たないわけですから、興味のないことにはまったく関心を示してくれません。そういう人たちにいかに注目してもらうかを考えるのも、広報の重要な仕事です。

ここで、広報室の主な仕事について再度まとめておきます。

■ウェブの一般向けページ <http://www.kek.jp/>

2002年1月に新トップページをオープンさせ、2004年4月、2007年4月に新しいデザインにしました。そこに毎週1本のニュース記事(毎週木曜日)を配信しています。これには、研究成果や加速器の専

門的な概念の解説、季節ごとの研究所の風景の紹介などの内容をもりこんでいます。2002年の開始以来、年間50本程度配信していますので、集大成すると相当な量になっています。必ずしも毎回分かりやすい内容になっているとは思いませんが、広報室としてかなり努力をしています。また、研究者も研究成果にニュース内容を反映させるなど、うまく再利用されている面もあります。

■メールマガジン

一般向けのNews@KEK（週1回）、プレス関係者向けのpress-info（随時）、kek-pr-now（月1回）など、いくつかのメルマガを発行しています。

■広報室員の会合

各研究グループから広報担当が出席して、機構全体の広報活動について議論しています。

■プレスリリース、記者会見、質問対応、メディア対応

学会や国際会議での研究成果を発表するときはプレスリリースを作成します。これはあまり知られていないのですが、プレスリリース作成は、かなり神経を使う作業です。プレスリリースを通さず情報が独り歩きしないように、必ず、事前に文部科学省など所管の役所と調整します。これは、研究機関の鉄則です。このようにして分かりやすく書かれたプレスリリースをもとに、記者会見を開催したり記者クラブに情報提供したりします。その上で、マスコミと質疑応答したり、追加の質問に応じたりします。さらに詳しい専門的な情報を求められると、その分野の専門の研究者に相談しますが、一般的な質問の場合は広報室で対応します。

■TV番組・映画撮影・写真家来訪等対応

ノーベル賞受賞のときもそうでしたが、テレビ番組の取材に対応したり、映画撮影に協力したりします。また多くの有名無名の写真家も撮影のために来所するので、加速器の状況や現場の研究者の研究状況などを勘案して、日程調整を行なっています。

■一般公開、団体見学、科学技術週間公開対応

■展示ホール「KEKコミュニケーションプラザ」運営**■記者懇談会、勉強会**

記者会見とは別に、専門分野の研究動向を伝えるために、それぞれの分野で著名な研究者を招いて、記者懇談会や勉強会も開催しています。

■要覧・パンフレット・ビデオ等の編集・出版**■海外の研究所の広報室との対応****■その他**

このように、広報室はさまざまな活動をしています。広報の基本は、「先読み」「気配り」「火消し」と言えます。つまり、どういう研究成果がもたらされるかを先読みして、あらかじめ新聞記者たちと勉強会などをしていますが、そういう意味では、現在どういう研究が行なわれて、将来どういう成果が生まれるか予測するという意味での「先読み」が必要です。また、さまざまところと連絡をとりあったり調整したりするという点では「気配り」が必要です。さらに、何か問題が生じたときの対応として「火消し」機能が求められます。

1.3 News@KEKの最近の傾向からのまとめ

先に紹介した、毎週発行のNews@KEKの最近の傾向を紹介しておきましょう。2008年の1年間のアクセスログを調べてみると、記事の内容によってアクセス数にばらつきがあります。「世界を変えた1つの論文」という小林・益川両先生の成果を発表した記事は、11万件のアクセスがありました。この記事自体は2003年頃に書いたのですが、ノーベル賞を受賞したことによって、アクセス数が急増したわけです。

例年はタンパク質、ニュートリノ、スーパーカミオカンデなどの記事への関心が高い傾向があります。その他、素粒子の周期律表などの解説風記事もアクセス数が多く、宇宙の謎解きなどの好奇心をくすぐる記事は長期にわたって読まれています。さらに、コンクリートや金属の疲労破壊、病気診断治療などの実用的記事には、質問も含めて大きな反響があります。

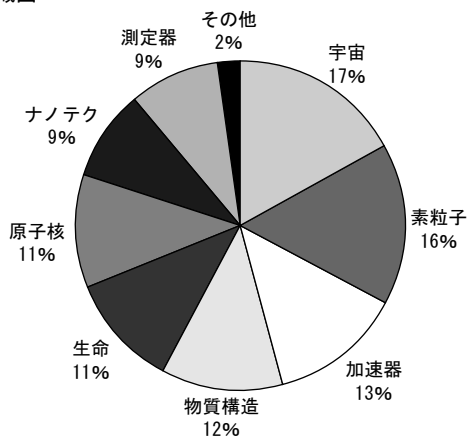
毎週1回発行していると、だんだんわれわれが「読んで欲しい記事」と、読者の側が「読みたくなる記事」の間にはギャップがあることも分かってきます。逆に言えば、多くの人に読んでほしい場合は、どういふ記事を書けばいいかも分かってきたのですが、研究所という性格上、なるべく均等に多くのテーマを取り上げるように心がけています。

ニュース記事の最後に、無記名で任意のアンケートをつけているのですが、その内訳をみると、年代は、50代、30代、40代がほぼ拮抗しており、20代はやや少ない傾向があります。性別では、男性が圧倒的に多く9割にのぼっています。職業別には、会社員が多く、自営業(主婦も含む)、大学生、研究職、大学院生などが続いています。地域的には首都圏が多いのですが、最近では、ノーベル賞受賞や修学旅行の見学などの影響で、地方にもしだいに認知されるようになりました。このように、派手ではありませんが、地道に着実に認知が広がっていると言えます。

記事の内容についての質問では、ほとんどが任意で答えてくれるせいもあり、約8割が「面白い」(79%)としており、「少し面白い」(14%)と合わせると9割以上が興味を感じています。役に立ったかどうかについては、「役立った」(57%)「少し役立った」(20%)となり、約8割が役立っていると感じています。読んだきっかけは、「KEKのトップページから」と「以前から読んでいた」が、いずれも25%と拮抗しており、リピーターが多いことがわかります。その他は、検索サイトやメルマガなどが挙げられています。今後読みたい分野については、【図2】のように分布しています。

自由記述のコメントもいろいろ書かれていますので、そのいくつかを抜粋しておきます。わざわざ任意で記入してくれるため、好意的な意見が多くなっていますが、彼らは、熱心にニュースを読んでくれているわけですから、こういう人たちが増えてくれば、広報として成功していると言えるでしょう。

【図2】KEKの組織図



〈自由記述から抜粋〉

- ・物理が苦手でしたが、何となくわかったような気持ちになります。私にとって、頭の体操です。平易な記載をお願いいたします。
- ・8月にKEKを見学させて頂いたので、それ以来この手の記事を読ませていただくと、その情景が蘇ります。kamLANDも見せていただきました。
- ・科学の知識を身につけるために活用したい。
- ・物理成果の発表の過程が政治的で、かつ画一的でつまらない…
- ・偶然見つけた記事でしたが、アミノ酸の反転の発見はすごく刺激的なニュースですね。楽しめました。
- ・いつも大変良い内容で楽しみにしています。素人ですが科学に関心を持ち続けたいです。特に今回のはじっくり勉強したいです。
- ・毎週欠かさず読んでおります。今後とも良い知恵を授けてください。
- ・なかなか他では読めない分野の記事で非常に楽しみにしております。
- ・宇宙の根源、物質の起源解明という人類の「夢」解明に期待しております。
- ・いつも楽しく読んでます。今回はリンクがたくさんで正月休みが楽しくなりました。いなか（大分市）にいるのでネットは助かります。

でも本当はkekの一般公開や各種シンポジウムに行きたいのですが。都会の人がうらやましいです。やっぱりそういう面では大人も子供も損していると思います。これからもkekニュース楽しみにしてます。印刷は時々してますが、いつか本にしてほしいです。

- ・ 解り易く、知的好奇心を喚起する文章で面白く拝読しました。この分野そのものは大変にエキサイティングなものですが、「一般にもわかる易しい説明」となるとそういったエキサイティングな知的興味をそそる部分は失われてしまいがちですが、今回の記事ではある程度科学に興味のある一般（非専門家）の大人が読んで、理解でき、且つ、面白いと思えるところがよかったですと思います。勿論、解り易さは大事ですが、解り易くしようとするあまりに退屈なものになってしまう一般向けの記事は新聞や雑誌でも多いように感じます。

以上のアンケート結果から、News@KEK について考察すると、次のようにまとめることができます。

まず、アンケートは匿名任意なので回答率は低いのですが、熱心な読者が回答してくれています。しかし彼らは、社会的にはやはり少数派ですので、今後、さらに広く社会に認知していくための努力が必要だと思えます。

また、中年世代の男性が圧倒的に多いので、女性、青少年、高齢者などへの浸透をはかることも課題です。さらに、読者の絶対数の増加、関東圏以外での認知度の向上、メルマガ、検索サイト、口コミ等による露出度の増加なども今後の課題です。同時に、インターネットを使わない層への訴求も必要です。実際、紙媒体での購読を希望する人もいたので、そういう人には印刷したニュースを郵送しています。それ以外に、講演会などネット以外の手段の拡充も必要です。

一番大変なのが、そもそも科学技術に無関心な層への訴求です。これは、科学技術広報の最大の難点です。このような観点からすれば、新聞は科学技術について伝えるのにはふさわしいメディアだと言えま

す。まず発行部数が多いという利点があります。露出度からすればテレビが有効なのですが、すでに指摘したように、テレビでは、こちらが思うような情報発信ができにくく、逆に、番組が一人歩きし、誤解を与えやすい情報が発信されてしまいがちです。

2. 「分かりやすい」広報をめざして

2.1 科学技術ジャーナリストからのアドバイス

以前、元新聞記者だった科学技術ジャーナリストの藤本瞭一さんを招いて勉強会を開催し、いろいろなアドバイスをいただいたことがあります。以下、そのときの指摘をもとに、新聞報道の仕組みなどについて紹介しましょう。

まず新聞社には記者がたくさんいますが、記者が書いた記事に、デスクが見出しをつけるなどの編集をし、科学面、生活面、文化面などに割りつけていきます。デスクは記事の掲載について強力な権限をもっていますが、記者に原稿執筆を強制できず、どんな記事をどう書くかは、一人ひとりの記者の権限だそうです。一方、記者は掲載の可否、見出しの指定などはできません。

なお新聞には、毎日必ず締め切り時間がありますので、記者会見は締め切り時間を想定して開催するなどの配慮が必要です。紙面印刷は、配送に時間がかかる遠方地域からの版から順番に刷り始め、配送も遠方から先に行なわれます。したがって、遅い時間に記者会見を開催すると、その情報は東京近郊の紙面にしか掲載されないことになります。広報担当者はそういうことも常に念頭に置いて、新聞記者とつきあわなければなりません。なお、記事掲載の有無や記事の大小は、その研究(技術)の評価に依存します。さらに、記者会見の基本ルールもあります。まず、記者会見に出席する記者は“素人”である場合が多いので、代打記者にも分かるように説明しなければなりません。

また日本には、複数のメディアで構成される記者クラブ制度があり、毎月持ち回りで幹事社を決め、月ごとに幹事社が記者会見のしきりな

ど、全責任を負っています。記者クラブに対しては、事前の記者会見をして、報道解禁日を設けることがあります。たとえば、ある研究成果を国際会議で発表する際など、先に研究者が記者会見をして新聞記者に説明します。新聞記者は分からない点などをあらかじめ聞いておき、その研究者が国際会議で発表する日本時間にあわせて、いっせいに報道解禁します。記者は事前にいろいろ調べなどをして、準備が整ってから報道できるのでありがたがられます。一方、われわれも事前に調整した上で記事にされるため、誤解も少なくやりやすい面があります。このように、一種、もちつもたれつの関係もあるため、最近いろいろ批判されているものの、なかなか記者クラブの制度から離脱できないでいます。

2009年6月にロンドンで科学ジャーナリスト会議があり、そこで、科学ジャーナリストは本来自主独立であるべきで、科学ネタは自分のセンスで研究現場から発掘すべきだという議論があったそうです。しかし実際は、科学の現場は非常に分野が広がっているため、どこでどんな新しい研究成果があげられているかについて、一人ひとりの科学ジャーナリストが調べることは困難な時代になっています。また、その科学ネタについても、研究者に質問しなければ正しい理解はできません。

したがって記者クラブを通じて、研究機関広報が情報を提供するのには、記者にとっても都合の良い情報入手の場になっているのです。研究機関の広報の側からすれば、研究成果が比較的記事になりやすいので、その意味でも、もちつもたれつ関係にあるわけです。一方で、独立性が要求される科学ジャーナリストも、記者クラブ制度を利用する時代になりつつあります。ですから、ロンドンの科学ジャーナリスト会議でも、批判はあるものの、有効な手立ては提案されませんでした。

2.2 プレスリリースの効果的な作り方

プレスリリースのために研究者が記事を書く場合、しばしば陥りがちなのは、いわゆる「研究部落」の狭い領域での常識に浸ってしまう

ことです。もちろん、それ以前に、記事の基本である「5W1H」を満たしていないもの、予算、研究期間等の基本的なデータのまちがっているものは問題外です。新聞記者は、そのプレスリリースをもとに記事を書いて、何百万部もの新聞を通じて配信されるわけですから、データのまちがいは致命的です。また、どこがニュースなのか、ポイントを的確に表示して書かれていることも大切です。

現代は、研究者の責務として説明責任が求められる時代です。都合の良い情報開示だけでは失格です。ジャーナリストは本来何がニュースかを探り、国民に的確な判断材料を提供します。そこが広告とジャーナリズムとの違いです。また、すでにアウトリーチ活動は研究者の責務になっているため、社会の支持をどう得るかを考えることも、これからの研究者にとって重要な要素です。

以上が新聞記者の側から見た、研究者に求める条件です。では、実例として、表現による印象の違いを経験してみましょう。

- | |
|--|
| <p>A. シリコン半導体の超微細化に道
——単一イオン注入法でしきい値電圧を低下——</p> <p>B. シリコン半導体の限界突破へ新手法
——不純物原子を1つずつ制御して注入——</p> <p>C. シリコン系量子素子実現に一步
——不純物原子の注入位置を1個ずつ制御——</p> |
|--|

記者クラブには、多くの研究所などから毎日プレスリリースが大量に送られてきます。新聞記者は、タイトルとサブタイトルの印象から、その内容を記事にするかどうかを一瞬のうちに判断します。A~Cのどの表現が、内容についてのイメージが喚起されるでしょうか。

多くの方は、Bが分かりやすいと感じるでしょう。Aは研究者が陥りやすい表現です。「シリコン半導体」も「超微細化」もなんとなく分かりますが、「単一イオン注入法」も「しきい値電圧」も、ほとんどの人は理解できないでしょう。したがって「しきい値電圧を低下」さ

せることが何を意味しているのか、なぜそれがニュースになるのか、さっぱり分からないでしょう。

それに対して、Bはかなり分かりやすく書かれています。難しい専門用語をなるべく使わないように書かれているからです。「限界突破へ新手法」も言葉としては難しいものではありませんし、ニュースだと感じることもできます。「不純物原子を1つずつ制御して注入」も、正確には理解できないにしても、なんとなく分かります。一般紙の記事なら、この見出しになるでしょう。

ただ、日刊工業新聞や日経などなら、Cではないかと思います。工業新聞の読者は理系が多く、シリコン素子についても理解できると思われるからです。また「不純物原子の注入位置を1個ずつ制御」も、非常に正確に書かれています。

ですから、媒体の性質によって、プレスリリースのタイトル、見出し等も工夫する必要があるわけです。どこまでの情報量を伝えるか、またその際、どこまで専門用語を使うべきか。こういった点も意識する必要があります。

そこで次に、以下のプレスリリース原文を見てください。これは、この研究所のものではなく、藤本さんが例として挙げた、理化学研究所の研究者が書いた原文です。

|||||

mRNAを合成するメカニズムを解明

——“分子生物学のセントラルドグマ” 解明の手がかりつかむ——

独立行政法人理化学研究所（野依良治理事長）は、DNA上の遺伝情報をmRNAへと正確に伝達する仕組みを明らかにしました。理研播磨研究所細胞情報伝達研究室の横山茂之主任研究員、ドミトリ・バジリエフ（Dmitry G. Vassylyev）副主任研究員およびSUNY Health Science Center（米国）の研究グループによる成果です。

RNAポリメラーゼは、DNAの遺伝情報を正確に読み取り、mRNAを合成する重要なタンパク質です。研究グループは、バクテリアに感染する

は理解できません。どうしても専門用語が必要な場合は、末尾に用語解説をつけなければなりません。

このようなことを念頭において、一度自分の書いた文章を縦11文字程度にレイアウトを変更してみるといいですよ、と藤本さんからアドバイスされました。そうすると、いかにふだんから長い文章を書いているかが自覚できるそうです。

ともかく、研究機関の広報を担当していると、常にこういう文章と向き合っています。研究者に執筆を依頼すると、こういう内容の文章になることがしばしばです。そこでこの原文を例に、報道資料としてのいくつかの問題点を指摘しておきましょう。

●形式上の問題点

1. ローマ字略語に説明がない
2. 英文表記に日本語表記がない

特に人名の場合、新聞ではアルファベット表記ができませんから、カタカナ表記がどのメディアでも同じになるように配慮しなければなりません。

●内容上の課題

1. 何をどうしたのかが明確ではない
2. フロントページに必要ない説明が入っている
3. 全体に専門用語が多すぎる

理想的には、一人ひとりの研究者が自覚して、分かりやすい記事を書くことがベストですが、現実には、プレスリリースとして適切ではない文章になりがちです。逆に、研究者になったら、広報担当者や科学記者は何が分からないかを知っておくことが大切です。それを意識しながら文章を書くと、みんなに理解してもらえます。それは、研究者にとってもプラスになります。たとえば科研費の申請書類を書く際にも、一般の人は何が分からないかを知っておくと、違う分野の研究者にも理解されやすくなります。このように、他人がどう感じるかを意識することは、研究者にとってもメリットがあるのです。

以下、藤本さんの指摘をもとに、プレスリリースのポイントについて

てまとめておきます。

●プレスリリースは一人歩きする

プレスリリースは一度発表してしまったら、一人歩きしますので、基本的な内容のまちがいなど絶対にしないように、細心の注意が必要です。

●ニュースバリューの大きい順に紹介する

カタログ的に全部を紹介するのではなく、ニュース価値のある情報を中心に作成することが大切です。また、対象分野の研究動向の中での発表成果の位置や貢献度を明確にすることも重要です。

●重大ニュースに形容詞はいらない

誰でも分かるニュースはマスコミが価値判断しますので、プレスリリースに仰々しい形容詞などは不要です。ただし価値判断が難しい場合には適切な説明が必要です。

そもそも科学報道の場合、新発見の内容についての記述は最後の3分の1程度で、前半の3分の2は背景知識の説明などバックグラウンドの報道に費やされるそうです。

2.3 研究者の原稿を平易にリライトしてみよう

以上のことをふまえて、課題として、ニュース記事のリライトを試してみましょう。2つの記事はいずれも、News@KEKの記事用に研究者が書いたものです。まず、何が記事のポイントかを読み解いてください。その上で、一般読者に読みやすく説明する記事にリライトするにはどうしたらよいかを考えてみましょう。たとえば、専門用語をなるべく平易な言葉に言い換えるなどの工夫が必要です。

次に、二人一組になって、お互いに自分が読んだ記事のポイントを60秒で相手に伝えてみましょう。60秒でポイントを伝えるためには、どこまでしゃべればいいのか、実感として感じてみるのが大切です。テレビやラジオのニュース担当のアナウンサーは、30～60秒でしゃべるトレーニングをしているそうです。その後、お互いの発表について、分かりやすいと感じたポイント、分かりにくいと感じたポイントなど

を指摘しあいます。

こうした練習を繰り返すことによって、科学コミュニケーションを考えるきっかけになると思います。

■課題の記事

①ビームの衝突について

②中性子を使って物質の構造を調べる～世界で最も精密な中性子回析装置～

■課題の手順

1. 原稿を読み込んで、一般読者向けの記事にリライトする
2. 二人一組になって、それぞれが読んだ記事のポイントを60秒で相手に伝える

研究機関の行なう科学コミュニケーションの基本は、研究者の最新の科学成果を一般の人に分かりやすく説明し伝えることです。また新聞記者は毎日大量に送られてくるプレスリリースの中から、ニュース価値のある情報を短時間に探り、デスクなどとの編集作業を通じて、紙面に掲載していきます。こうした一連の作業を経て、最新の科学成果が社会に伝わっていくわけです。研究者もこうした仕組みについて知っているかどうか、自分の成果が社会に伝わるかどうかの境目になります。そのためにも、自分の研究成果の紹介にあたっては、背景情報の提供もふまえて、分かりやすい記事や紹介文を書くことが重要になります。皆さんも、これからどういう道に進むか分かりませんが、それぞれの立場をふまえた上で記事を書いたり、人に伝えたりする工夫をしてみてください。科学コミュニケーションにおいては、常に研究者の最新の科学成果に対してアンテナをはり、その発表の方法について準備しておく心構えが大切なのです。

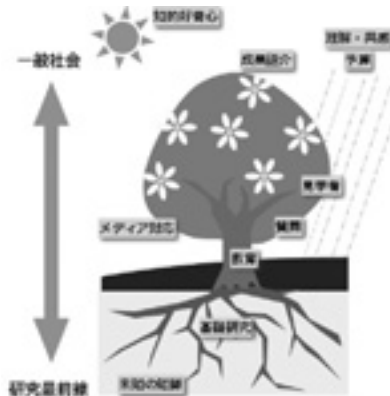
今日の課題で使った2つの原稿は、News@KEKの原稿用に私が書き直しました。たとえば、「中性子を使って物質の構造を調べる～世界で最も精密な中性子回析装置～」は、「中性子の100メートル走～世界一精密な中性子回析装置～」(2007. 10. 18)というタイトルで、ウェブ用

に書き直して掲載しています。ウェブに掲載する場合、原則として長さの制約はありませんが、長すぎると読んでもらえません。ただ、アニメなど動画を使って説明することができるので、視覚的には理解しやすいと思います。

2.4 学術研究広報は「広報の木」で大きく育てる

このように、研究機関広報は、これまで紹介してきたような仕事を毎日行なっています。私は、研究機関における学術研究広報のあり方を「広報の木」で説明しています(【図3】)。

【図3】学術研究の「広報の木」



究極の目的は、研究所の活動や成果を理解してほしい、そのための情報が正しく伝わってほしいということにつきます。基礎研究は大地に根をはっているため、外からは、どこまで深く根をはっているか見ることができません。それをきちんと研究の成果=果実として世の中に伝えていくことによって、社会の目に触れ、研究の理解につながり、ひいては次世代の育成やその分野の発展へ向かうことが可能になります。また予算もきちんととられるようになります。すなわち、広報は、研究の世界と社会とをつなぐ、インターフェイスやインタープリターであるわけです。いわば、基礎研究という「根」を根付かせ、教育と

いう「幹」を育て、成果紹介という「花」を咲かせ、国民の理解という「雨」を降らせる——研究機関の広報は、このような重要な役割を担っていると考えています。

〈質疑応答〉

—— 研究所の広報と新聞社の間で記事の掲載についてやりとりする間に、研究者ともやりとりがあるのでしょうか。

森田 研究機関広報は、必ず研究者と密接に連絡をとりあっています。私がリライトする場合も、必ず元の原稿を書いた研究者に見てもらって、科学的な事実誤認がないかなどチェックしてもらいます。ただし、分かりやすさは、両者でのせめぎあいです。研究者がリライトに納得しない場合は、何度もやりとりします。ただし、News@KEKの場合は、最終的には、内容、見出し等、広報室が責任を負います。

逆に新聞記者と広報、新聞記者と研究者の間では、新聞記者は、報道の中立と自立が大前提ですから、まず事前に記事は見せてくれません。したがって、記者が誤解すればまちがった記事が掲載されます。ですから、なるべくまちがいが起こらないようなインタビューの受け答えが大事です。もっとも場合によっては、記者が事前に研究者や広報のチェックを求めるともありますが、それはあくまで記者の側が決めることです。しかししたいの場合は、チェックなしに記事が掲載されるので、後からトラブルになることもあります。広報は、研究者と新聞記者で、なるべく行き違いが生じないように努力することが仕事の1つです。

—— 森田さんのような研究者が広報を担当するメリットとデメリットについて教えてください。

森田 メリットは、研究者の仕事の環境や気持ちが分かることです。

専門用語も平易な言葉に言い換えることができますし、その意味では、研究者が広報に携わる意義はあると思います。デメリットは、逆に研究者の状況が分かりすぎることで、新聞記者に伝えるときにも、専門用語を不用意に使ったりします。それから、現在は専門が非常に多岐にわたっていますので、近い分野でなければ研究のことが分かりにくいという面もあります。元研究者だからといって、すべての分野に知識があるわけではありません。私自身、素粒子を専攻してきたので、素粒子関連については分かりますが、生物はまったく分かりません。逆もまた言えます。それほど、それぞれの分野で独自の専門用語や概念を使っているわけです。それが、科学広報の難しいところです。

—— 広報の中で、複数の専門研究者が連携することはあるのでしょうか。

森田 それは十分あります。広報すべき分野の広がりにつれて、専門家の役割分担も行われるようになっていきます。いろいろな分野の広報が求められるようになると、専門家同士の連携が不可欠になってきます。

—— 新聞は掲載スペースが少ないので、絶対削ってほしくないところ、削られると意味が通じにくいところも削られてしまう場合もあると思いますが、そのときは広報で対応するのでしょうか。

森田 新聞記事の場合、まず訂正記事は掲載しませんので、広報として対応しますが、そのケースはいろいろです。たとえば、次の機会にリカバーしてもらうこともあれば、ウェブで詳しい情報を掲載して補足することもあります。新聞記事ではよく理解できなかったが、改めてホームページで読むとよく分かったという反応はよくあります。また、研究者もまちがった記事が掲載されないように自衛していく必要がありますし、研究者とメディアをつなぐ科学コミュニケーターの役割も広がっ

てきます。研究者、メディア、広報や科学コミュニケーターの役割分担が必要な時代になってきています。